

COVID-19 蔓延下における個別大学の入試に関する高校側の意見

倉元 直樹, 宮本 友弘, 長濱 裕幸 (東北大学)

2021 (令和3) 年度入試は特別な年となった。高大接続改革の開始予定年度であったが急な方針転換の上に、突然、COVID-19 の流行に見舞われ、その中で受験生も実施側も未経験の対応に追われたからである。本稿は東北大学が個別大学としてコロナ禍の下で万全な入試実施を模索するために、AO入試Ⅱ期、Ⅲ期及び一般選抜を対象にして行った高校調査の結果である。2020 (令和2) 年秋の時点では、筆記試験に対しては地方会場の設置、面接試験はオンラインの希望が多かった。コロナ禍の下で初の入学者選抜を終えた現在、貴重な経験を踏まえ、受験生保護の大原則に基づく「ウィズコロナ時代」の大学入試の検討が喫緊の課題となるだろう。

キーワード: COVID-19, オンライン, 地方会場, ウィズコロナ, 受験生保護の大原則

1 問題と目的

2021 (令和3) 年度入試は新型コロナウイルス感染症 (以後、「COVID-19」と表記する) による未曾有のパンデミックに襲われた中で行われた。広範に流行した感染症という意味では2009 (平成21) 年の新型インフルエンザが記憶に新しい。入学者選抜の実施において特別な対応が取られたことも事実である (倉元・安藤, 2011)。しかし、入試が本格化する時期には通常のインフルエンザ以上に重症化することはないことが知られており、翌年には通常の状態に復帰した。

一方、COVID-19 の場合、影響の大きさも期間も新型インフルエンザとは比較にならないような深刻さを伴っている。影響は単年度に止まらず、生活習慣や社会の在り方も変容を迫られている。その中で行われたのが2021 (令和3) 年度入試であった。対策として何が有効か、通常とは異なる何をすべきか、それ自体が手探りで進んでいった。本研究は、その手探り状態の途上における記録を残す試みである。とりわけ、情報や実施条件が不完全な中、目前に迫った受験生を送り出す高校側が何を望んだかを分析しておくことにより、大学入学者選抜において重視すべき原理原則を改めて確認する。ひいては、不透明な状況における大学入学者選抜の実施における具体的な意思決定のよりどころを探る。

1.1 コロナ禍の下での大学入学者選抜の準備

当初から2021 (令和3) 年度入試には特別な位置づけが与えられていた。それは、高大接続答申 (中央教育審議会, 2014) の下に進められた高大接続改革の導入予定年度だったことによる。受験生も大学も大改革への対応に追われていた。

東北大学では高大接続改革による入試の激変を回

避するために様々な問題を抱えて対応していた。2018 (平成30) 年頃には準備が本格化した。例えば、大学入学共通テスト (以後、「共通テスト」と略記する) への記述式問題導入に端を発する日程問題からAO入試Ⅲ期が継続不可能になる危機に追い込まれ、第1次選考に自己採点を利用するという「奇策」に打って出ることになった (倉元・長濱, 2018; 倉元ほか, 2019, 東北大学, 2018)。このほか、英語民間試験の導入などのドラスティックな改革も予定され、各種課題への対応に苦慮しつつも2021 (令和3) 年度入試に向けての準備を整えていた。ところが、高大接続改革は2019 (令和元) 年末頃から徐々に方向転換した。共通テストへの記述式問題の導入も同年12月17日に見送りが決定した¹⁾。AO入試Ⅲ期の第1次選考における自己採点利用は撤回され、受験生を困惑させたであろう大幅な入試制度の激変は回避されたかに思われた。

大学入試政策改革とその対応に伴う動揺が収まり、2021 (令和3) 年度入試の準備に本格的にかかろうかという時期に突如として現れ、世界中を席卷したのがCOVID-19の蔓延である。わが国では、第1波と呼ばれる最初の流行期は2020 (令和2) 年3月中頃から5月頃であった。具体的な感染機序が解明されておらず、未知の感染症への恐れも伴って、社会全般に広範な行動制限が加えられた。2020 (令和2) 年度入試への影響は局所的に抑えられた²⁾ が、緊急事態宣言の発令に先だって公教育の活動は3月から停止し、本来4月からの新年度開始も実質的に大幅に遅れた。

大学でも全国的にキャンパス閉鎖やオンライン授業への移行が慌ただしく進む中、テレワークも加わって大学入学者選抜の準備が進まない状況となった。さらに、関連して勃発したのが秋入学移行の議論である。様々な入試関連情報の公表準備が最終段階に差し掛か

った時期に秋入学移行の議論に巻き込まれた(倉元, 2020a) こともあり, 文部科学省による全国的な対応方針の表明も遅れがちになった。5月になって総合型選抜, 学校推薦型選抜に関して配慮を求める通知(文部科学省高等教育局長, 2020a) が発出されたのが最初の本格的な対応となった。

大学入学者選抜実施要項(以後, 「要項」と略記する)の公表も例年から3週間ほど遅れた6月19日に発出された(文部科学省高等教育局長, 2020b)。変更点の概要は, 大きな変更がある場合には1年前の要項に予告という形で知らされるのが慣例となっているが, COVID-19に関わる広範な特別対応は, 要項の公表で初めて明確になった。具体的には, 一般選抜では, 大学入試センター試験に替わる初年度の共通テストについて, 学習の遅れに配慮して2週間後の「第2日程」を選択できる制度となり, それに伴い, 2月13, 14日に「特例追試」が設けられることとなった。また, 個別学力検査にも COVID-19 の罹患に配慮した追試験が設けられるなど, 広範囲にわたる大きな変更があった。各大学は入試日程等に大きな変更を余儀なくされ, 急遽, 7月末の公表期限に向けて選抜要項の詰め作業を行うこととなった。この時期, 横浜国立大学が一部を除いて個別学力検査中止を公表したことは, 各大学や受験生サイドに大きなインパクトを持って受け止められたと思われる。

1.2 令和3年度入試に向けた高校調査

東北大学では学内の感染症対策本部や文部科学省から通知される COVID-19 への対応方針に依拠しつつ, 公表通りの選抜の実施を基本として準備が進められた。それでも10月にAO入試Ⅱ期³⁾の出願, 11月には実施を控え, 何をどこまで準備すべきか, 的確な判断を下す根拠となる情報が不足していた。ひき続き, 翌年2月にはAO入試Ⅲ期と一般選抜前期日程個別試験, 3月には後期日程個別試験も控え, 方針策定のためのエビデンスが求められていた。

そこで, 2017(平成29)年度から年度末の時期に実施していた東北大学の入学者選抜に関わる高校調査について, 急遽, COVID-19 への対応をテーマとして8月に前倒しで実施することとなった。「県境をまたいだ行動制限が要請されるような状況」を想定したうえで, 大学入試をその例外と位置付けて予定通り実施すべきか否かを中心に, その他, 何らかの特別な対応をすべきかについて問う内容とした。

一連の高校調査はその都度テーマを決めて行われてきた。初回の2017(平成29)年度は高大接続改革

に伴う「自己採点利用方式」の導入や英語民間試験, 共通テストに導入予定の記述式の利用に関する調査(倉元・長濱, 2018; 倉元・宮本, 2018; 倉元ほか, 2018; 倉元ほか, 2019)であった。2回目は前回調査を参考に決定された「予告」や一般選抜の主体性評価用チェックリスト導入に関する意見(倉元・長濱, 2019; 倉元ほか, 2020)に関する内容であった。3回目は結果的に中止となった東京オリンピック開催に伴う2020(令和2)年度オープンキャンパスの日程変更等が中心の調査であった。本稿の調査はそれらに続く第4弾の高校調査と位置付けられる。

なお, 今回の調査内容は東北大学の個別大学としての対応に関するものであり, 共通テストへの対応は含まれない。また, 東北大学の入学者選抜は, 選抜対象となる母集団が異なる特別選抜を除くと, AO入試Ⅱ期, AO入試Ⅲ期, 一般選抜が存在するが, 特徴が異なることから, それぞれについて尋ねることとした。

2 方法

2.1 調査対象

例年の調査に準じ, 全国の高等学校, 中等教育学校及び高等専門学校6,015校のうち, 東北大学に志願者, 合格者を多数輩出する高等学校等325校を調査対象とした。選定基準は以下の通りである。いずれも前回までの調査基準を踏襲し, 今回の調査に合わせて調整したものである。一部に入れ替わりはあるものの, 大半の調査対象校は例年ほとんど同じである⁴⁾。

- (1) 2014(平成26)～2020(令和2)年度入試において通算合格者数11名以上の高等学校 / 中等教育学校(該当300校)
- (2) 2014(平成26)～2020(令和2)年度入試において通算合格者数8名以上の高等学校 / 中等教育学校のうち, AO入試Ⅱ期・Ⅲ期の双方に合格実績がある学校(該当25校)

2.2 調査方法

例年の調査と同様, 質問紙調査とした。調査票はA4判両面1枚である。東北大学のAO入試Ⅱ期及びⅢ期に対する認知及び関心に関わる質問が合計4項目, AO入試Ⅱ期第1次選考, 第2次選考, AO入試Ⅲ期第2次選考, 一般選抜個別試験の実施に関する項目が各1項目ずつ合計4項目, 全体で以上の8項目であり, 加えて自由記述欄がある。

実施方法は基本的に前回調査と同様である。郵送で調査票を送付し, 回答用特設WEBサイトにQRコー

ド等を通じてアクセスしての回答を標準とした。その他、電子メール、FAX 及び郵送による回答も可とした。調査票は MS-Word 版と一太郎版を用意し、ウェブサイトからダウンロードして入力することも可能とした。

2020（令和2）年8月3日に調査票が送付された。2度の督促を経て最後の回答は 2020（令和2）年 10月 26日に受け付けられたものである。

2.3 集計方法

例年の調査と同様、本調査の目的に鑑み、単純集計の他に調査目的に応じて通算、AO入試Ⅱ期またはⅢ期の志願者数、合格者数を重みとして用いた。

3 結果

3.1 カバー率

調査設計段階でのカバー率を表1に示す。調査対象校として選定された学校は全国の高等学校等のうち 5.4% に過ぎないが、志願者数や合格者数を基準にすると、全ての基準において8割以上が含まれている。

3.2 回収率と実質カバー率等

最終的に 264 校からの回答が得られた。表1に示す通り、返送率は単純集計で 81.2% に達した。設計段階のカバー率に返送率を乗じた実質カバー率は全志願者数基準で 73.1%、全合格者数基準で 76.7% に達している。AO入試Ⅱ期、Ⅲ期の各基準でも 73.7% ～ 82.8% に達しており、本調査の結果は本学に志願者を輩出する高校の代表的な意見を表すと考えてよい。

表1. 調査規模、返送率、カバー率

	調査票送付校	対象数	調査設計カバー率	返送率	実質カバー率
単純集計	325	6,015	5.4%	81.2%	4.4%
全志願者数	44,901	54,777	82.0%	89.2%	73.1%
全合格者数	15,090	17,737	85.1%	90.2%	76.7%
AOⅡ志願者数	4,024	5,028	80.0%	92.1%	73.7%
AOⅡ合格者数	1,261	1,488	84.7%	93.4%	79.2%
AOⅢ志願者数	5,216	6,087	85.7%	90.5%	77.6%
AOⅢ合格者数	1,891	2,103	89.9%	92.1%	82.8%

なお、回答及び返送方法としては、ウェブ回答が 208 件（78.8%）、FAX が 44 件（16.7%）、電子メール（添付ファイル）が 9 件（3.4%）、郵送が 3 件（1.1%）であった。同一校から複数回の回答が寄せられた場合には、最初の回答を有効とした。回答返送状況を図1に

示す。8月7日から返送が始まり、過半数は8月中に回答が寄せられた。2021（令和3）年度入試におけるAO入試Ⅱ期の募集開始日は 10月 16日であったが、それ以前に 258 件（返送率 79.4%、最終返送数に対して 97.7%）の回答が寄せられていた。

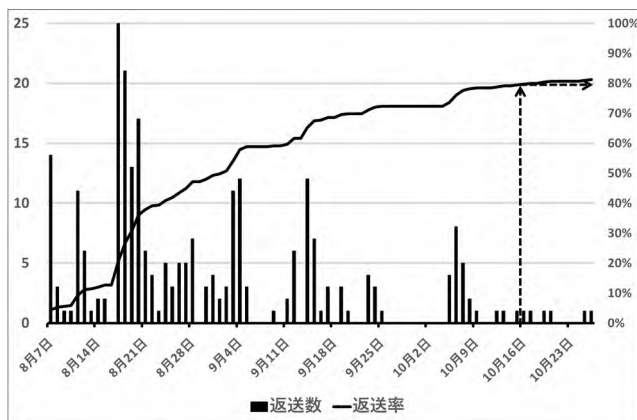


図1. 回答返送状況

3.3 AO入試Ⅱ期

3.3.1 AO入試Ⅱ期に関する認知と関心

東北大学のAO入試Ⅱ期に関する認知について4段階評定で質問した。結果を表2に示す。

単純集計結果では「あまり知らない」「ほとんど知らない」は合計 10%に満たない。残りが「よく知っている」と「ある程度知っている」に2分される。重みづけ集計では、3/4以上が「よく知っている」と回答している。「ある程度」を加えると志願者重みでは 99.2%、合格者重みでも 98.9%に達する。

表2. 東北大学AO入試Ⅱ期に関する認知

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
よく知っている	118 (44.7%)	2,835 (76.5%)	906 (76.9%)
ある程度知っている	123 (46.6%)	841 (22.7%)	259 (22.0%)
あまり知らない	16 (6.1%)	29 (0.8%)	13 (1.1%)
ほとんど知らない	7 (2.7%)	2 (0.1%)	0 (0.0%)

*: AO入試Ⅱ期の志願者数、合格者数

次に、東北大学のAO入試Ⅱ期に関する関心について4段階評定で質問した。結果を表3に示す。単純集計結果で見た場合、「あまり関心はない」「ほとんど関心はない」は合計 5%に満たない。「強い関心がある」が半数を超え、「ある程度関心がある」も4割を超える。重みづけ集計では、85%以上が「強い関心」と回答しており、「ある程度関心」を合わせるといずれの重みで

も 99.7%に達する。

以上のことから、本研究の回答者は十分な知識と関心の下、以下の回答を寄せていると考えてよい。

表 3. 東北大学AO入試Ⅱ期に対する関心

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
強い関心がある	140 (53.0%)	3,228 (87.1%)	1,012 (85.9%)
ある程度関心がある	111 (42.0%)	468 (12.6%)	163 (13.8%)
あまり関心はない	12 (4.5%)	11 (0.3%)	3 (0.3%)
ほとんど関心はない	1 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

*: AO入試Ⅱ期の志願者数, 合格者数

AO入試Ⅱ期は、2021 (令和3) 年度入試から実施する全ての募集単位において第1次選考で筆記試験を課し、第2次選考で面接試験を課す。したがって、調査項目も第1次選考と第2次選考に分けて尋ねることとした。なお、提出書類の審査は学部ごとに取り扱いが異なっている。

3.3.2. AO入試Ⅱ期第1次選考に対する意見

第1次選考では、入学後の教育に必要なアカデミック分野の基礎的資質・能力を測るための筆記試験が行われている。調査票には第1次選考での筆記試験実施が明示されている。状況設定としては「第1次選考の時期に県境をまたいだ行動制限が要請されるような場合、面接試験を中心とした第2次選考も実施困難な状況である」とした。

選択肢は「大学入試は行動制限の例外と位置づけ、予定通り筆記試験を実施する」、「日程を延期して筆記試験を実施する」、「地方会場を設けて筆記試験を実施する」、「筆記試験が中止となってもやむを得ない(提出書類のみで選抜を行う)」、「選抜を中止し、募集人員をAO入試Ⅲ期と一般選抜に振替える」の5肢択一とした。

表 4. AO入試Ⅱ期第1次選考に対する意見

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
予定通り実施	63 (23.9%)	892 (24.1%)	265 (22.5%)
日程延期して実施	14 (5.3%)	348 (9.4%)	112 (9.5%)
地方会場で実施	114 (43.2%)	1,932 (52.1%)	625 (53.1%)
筆記試験中止	26 (9.8%)	160 (4.3%)	46 (3.9%)
選抜中止, 定員振替	47 (17.8%)	375 (10.1%)	130 (11.0%)

*: AO入試Ⅱ期の志願者数, 合格者数

調査結果は表4に示すとおりである。最も多かった

のが「地方会場で実施」であり、単純集計で40%強、重みづけ集計ではそれぞれ50%を超えた。「予定通り実施」も約1/4ほどあり、例年に近い形で実施して欲しいという意見が大勢を占めたと考えられる。一方、「筆記試験中止」と「日程延期」は少なかったが、単純集計と重みづけ集計で様相が異なり、重みづけの方が「筆記試験中止」の意見が少なかった。従来から、「学力重視のAO入試」と位置付けて積極的に広報してきたが、AO入試Ⅱ期に多くの受験生を送り出す高校ほど、「筆記試験が必須である」という認識を示した格好である。

3.3.3. AO入試Ⅱ期第2次選考に対する意見

第2次選考では、東北大学への志望と入学後の研究への強い意欲の保持を確認することを目的に面接試験が行われている。調査票には面接試験の実施を明示した。状況設定として「第1次選考は実施済み」とした。

選択肢は基本的に第1次選考に関する項目と同じだが、「オンライン等の代替手段を用いて面接試験を実施する」という選択肢を加えて6肢択一とした。また、「面接試験が中止となってもやむを得ない」については、「提出書類および筆記試験で選抜を行う」とした。

調査結果は表5に示すとおりである。最も多かったのが第1次選考には設けていなかった「オンライン等で実施」であり、全体の4割強を占めた。「地方会場で実施」が少なくなり、15%前後となった。「オンライン」が「地方会場」の代替と捉えられた格好である。なお、選択肢数が異なるので単純に比較することはできないが、「予定通り実施」は第1次選考ほど多くはなかった。

「面接試験中止」は重みづけ集計では約1/4ほどを占め、第1次選考とは対照的な結果であった。最も少なかった回答が「選抜を中止し、募集人員をAO入試Ⅲ期と一般選抜に振替える」であり、重みづけ集計では1%程度であった。

表 5. AO入試Ⅱ期第2次選考に対する意見

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
予定通り実施	45 (17.0%)	614 (16.6%)	187 (15.9%)
日程延期して実施	5 (1.9%)	81 (2.2%)	18 (1.5%)
地方会場で実施	38 (14.4%)	534 (14.4%)	195 (16.6%)
オンライン等で実施	115 (43.6%)	1,513 (40.8%)	475 (40.3%)
面接試験中止	47 (17.8%)	923 (24.9%)	288 (24.4%)
選抜中止, 定員振替	14 (5.3%)	42 (1.1%)	15 (1.3%)

*: AO入試Ⅱ期の志願者数, 合格者数

基本的に「筆記試験を中心とした第1次選考が実施されれば、面接試験が中止となっても選抜は成立する」と考えられているようだ。

3.4 AO入試Ⅲ期

3.4.1. AO入試Ⅲ期に関する認知と関心

東北大学のAO入試Ⅲ期に関する認知について4段階評定で質問した。結果は表6に示す⁵⁾。

表6. 東北大学AO入試Ⅲ期に関する認知

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
よく知っている	128 (48.5%)	3,593 (76.1%)	1,399 (80.3%)
ある程度知っている	111 (42.0%)	977 (20.7%)	309 (17.7%)
あまり知らない	16 (6.1%)	109 (2.3%)	21 (1.2%)
ほとんど知らない	8 (3.0%)	26 (0.6%)	4 (0.2%)

*: AO入試Ⅲ期の志願者数, 合格者数

単純集計結果で見た場合、「あまり知らない」「ほとんど知らない」は合計10%に満たない。残りが「よく知っている」、「ある程度知っている」でほぼ2分される。重みつき集計では、大多数が「よく知っている」と回答しており、「ある程度知っている」を合わせると合格者数重みでは98.0%、志願者数重みでも96.8%に達する。

次に、東北大学のAO入試Ⅲ期に対する関心について4段階評定で質問した。結果は表7に示す。

単純集計結果の場合、「あまり関心はない」「ほとんど関心はない」は合計6%程度である。「強い関心がある」は6割近くに達し、「ある程度」も1/3を超える。重みづけ集計では85%前後が「強い関心がある」と回答しており、「ある程度」を合わせると志願者数重みでは98.4%、合格者数重みは98.9%であった。合格者数重みでは「ほとんど関心はない」という回答は皆無であった。

以上のことから、本研究の回答者は十分な知識と関心の下に回答を寄せていると考えてよい。

表7. 東北大学AO入試Ⅲ期に対する関心

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
強い関心がある	154 (58.3%)	3,937 (83.4%)	1,525 (87.5%)
ある程度関心がある	93 (35.2%)	712 (15.1%)	197 (11.3%)
あまり関心はない	15 (5.7%)	52 (1.1%)	11 (0.6%)
ほとんど関心はない	1 (0.4%)	4 (0.1%)	0 (0.0%)

*: AO入試Ⅲ期の志願者数, 合格者数

3.4.2. AO入試Ⅲ期第2次選考に対する意見

AO入試Ⅲ期はAO入試Ⅱ期とは異なり共通テストを第1次選考で行うため、第1次選考で独自の筆記試験や面接試験は課していない。したがって、調査においては第1次選考に関する項目は設けず、第2次選考に関わる質問のみとした。なお、第2次選考では一部の募集単位で筆記試験を課すものの、大半は面接試験のみの実施である。リード文本文に明示していないが、選択肢を共通テスト実施済みが前提と読み取れる表現とした。

選択肢は、「大学入試は行動制限の例外と位置づけ、予定通り第2次選考を実施する」、「第2次選考が中止となってもやむを得ない(共通テストおよび提出書類のみで選抜を行う)」、「選抜を中止し、募集人員を一般選抜に振替える」の3肢択一とした。実施日程が極めてタイトであることから、日程の延期、オンラインおよび地方会場設置などの対応は実質的に不可能であるため、選択肢に含めなかった。

調査結果は表8に示すとおりである。最も多かったのが「第2次選考中止」であり、その点ではAO入試Ⅱ期とは異なる結果となった。共通テストの実施が前提であることから、多くの回答者が面接試験と同一と理解したことが考えられる。「選抜を中止し、募集人員を一般選抜に振替える」の選択もAO入試Ⅱ期の第1次選考に対する回答と同様に、1割程度あった。

表8. AO入試Ⅲ期第2次選考に対する意見

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
予定通り実施	71 (26.9%)	1,193 (25.3%)	391 (22.4%)
第2次選考中止	157 (59.5%)	2,984 (63.2%)	1,175 (67.5%)
選抜中止, 定員振替	35 (13.3%)	528 (11.2%)	167 (9.6%)

*: AO入試Ⅲ期の志願者数, 合格者数

3.5 一般選抜個別試験

一般選抜については、基本的な知識や関心がない回答者は存在しないことを前提に、認知や関心に関する設問を設けなかった。

選択肢は5肢択一とした。「大学入試は行動制限の例外と位置づけ、予定通り個別試験を実施する」、「日程を延期して個別試験を実施する」、「地方会場を設けて個別試験を実施する」、「個別試験が中止となってもやむを得ない(共通テストのみで選抜を行う)」という4つの選択肢は基本的にAO入試Ⅱ期と同様である。特徴的なのは5番目の選択肢で、「令和3年度入試の募集を取りやめる」というものである。

調査結果は表 9 に示すとおりである。「令和 3 年度入試の募集を取りやめる」との選択肢を選んだ回答が皆無であったことが最大の特徴と言える。最も選択が多かったのが AO 入試Ⅱ期第 1 次選考と同様の「地方会場で実施」で約 4 割、次いで「予定通り実施」が約 1/3 であった。「個別試験中止」も約 2 割あったが、少数意見に止まっている。「日程の延期」は 1 割に満たなかった。

表 9. 一般選抜個別試験に対する意見

	単純集計	志願者数集計*	合格者数集計*
予定通り実施	76 (28.3%)	13,323 (33.3%)	4,335 (31.8%)
日程延期して実施	21 (6.0%)	3,192 (8.0%)	1,057 (7.8%)
地方会場で実施	103 (39.0%)	15,487 (38.7%)	5,441 (40.0%)
個別試験中止	63 (23.9%)	7,890 (19.7%)	2,727 (20.0%)
募集取りやめ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

4 考察

本調査は COVID-19 の第 1 波が収束した後、7 月末から 8 月にかけての第 2 波と呼ばれる 2 度目の流行が収束にかかった頃に実施されたものである。本調査の場合、調査時期、回答時期が重要な意味を持つ。調査時期は COVID-19 に対する極度の警戒感が薄れていくと同時に、感染症対策については未解明の部分が多かった頃に当たる。秋から冬にかけての第 3 波の襲来が予想されており、再度の流行に対する警戒感が強かった半面、入試の実施場面における接触が感染をもたらす可能性に関して、明確に否定できる具体的かつ客観的な根拠は見出せていなかった。

そのようなタイミングで実施された調査であるが、最初に注目すべき結果は、年度の最後の入試機会である一般選抜において、「募集取りやめ」という回答が 1 件もなかったことである。入学者選抜の実施に相当の危険が伴い、代替措置が困難と考えられる場合、机上ではその年度の募集を見送る判断も可能性としては存在する。しかし、それは受け入れられる選択肢ではないことが明確となった。社会機能が長期間にわたって完全にマヒして社会の在り方を根本的にリセットしなければならないような事態に陥らない限り、大学は最終的に何らかの手段でその年度の選抜を完遂する覚悟を持つ必要があるということだろう。そして、次に考えるべきは其中で取り得る手段の優先順位は何かということになる。

AO 入試Ⅱ期と一般選抜においては、「地方会場で実施」が最多の回答を集めた選択肢であった。地方会

場の設置は現実的には個別大学一大学では実現不可能である。真剣に実現を目指すとするれば、入試の実施を一括で扱う組織の新たな設置など、実施が個別大学に任されている現行の仕組みを根本的に見直す必要性があり、ハードルが高い。AO 入試Ⅱ期の第 2 次選考、すなわち、面接試験におけるオンライン入試の導入も調査当時は期待が高かったが、実際に経験してみると接続に関わる技術的問題や不正防止の不十分さ等の課題もが浮き彫りになったようである（例えば、大野, 2021; 大野ほか, 2021）。東北大学でも AO 入試Ⅱ期の第 2 次選考におけるオンライン面接試験の可能性は検討されたが、実現には至らなかった。面接試験、実技試験、筆記試験等、様々な選抜方法での利用が考えられるが、大学の授業における期末考査を用いて筆記試験のシミュレーションを行った研究によれば、少数であれば不可能ではないが、全体的には対面型の入試に代替する水準に至ってはいない（倉元・林, 2021）。オンライン入試の実践に関する研究はまだ少ない。今後も研究の蓄積が期待される。

以上の結果に加えて、全体を通じて「予定通り実施」も 2～3 割程度の選択があった。「予定通り」という表現は言葉足らずであるが「受験生が受験に向けて準備した選抜方法で実施してほしい」という意味が込められているのではないだろうか。地方会場やオンラインも予定していた選抜方法の置き換えを意味しており、告知した内容とは異なる代替法を導入することではない。あらゆる条件において、大学は予定して告知していた通りの実施を探ることが対策の基本と言えよう。

ただし、どうしてもそれが不可能となった場合の優先順位も考えておかなければならない。AO 入試Ⅱ期第 1 次選考における「筆記試験中止」は 1 割に満たなかったのに対し、AO 入試Ⅱ期第 2 次選考における「面接試験中止」については、他に多くの選択肢があったものの 2 割弱存在した。共通テストの実施を前提とした一般選抜における「個別試験中止」にも 2 割を超える支持があった。やむを得ない事情があって予定通りの実施がどうしても不可能となった場合に、一部の選抜資料で選抜を行わなければならない事態を想定する必要は否定できない。これらの結果を見ると、東北大学においては何らかの形で筆記試験的な内容の実施を模索する必要があるということになるのではないだろうか。

COVID-19 流行下で初めて行われた大学入学者選抜を経験した現在において、入試による集団感染が報じられたケースが皆無だったことは、本来、社会的に極めて高く評価されるべきであろう。その背景には、

文部科学省が示した的確な指針とそれを忠実に励行しようと腐心した個別大学、さらには感染予防に努めた受験生と周囲の努力がある。ウィズコロナにおける初の入試の経験から、過度に感染症を恐れて選抜方法を変更し、受験生の努力を無にするような対応までは必要がないことは示されたと言える。

流行状況がより深刻な欧米では、COVID-19 流行下での大学入学者選抜に対して、大胆な特別措置が取られたようである。一方、東アジア文化圏に位置する中国、韓国では、日本と同様に従来の選抜方法を保つことが腐心された(南, 2021)。「受験生保護の大原則」(倉元, 2020b)の基本理念は、受験生の努力を発揮する機会の保障にある。「ウィズコロナ時代」の大学入学者選抜方法の再構築は喫緊の課題だが、従来と同様に受験生保護の精神に則って検討されるべきであろう。

注

- 1) 結局、同年末に発足した「大学入試のあり方に関する検討会議」において議論が重ねられた結果、思考力・判断力・表現力の評価や総合的な英語力評価を各大学の個別試験等で推進する方針を示した提言が2021(令和3)年7月8日に公表され、記述式問題の共通試験への導入や英語民間試験の大規模な活用は正式に断念となった(大学入試のあり方に関する検討会議, 2021)。
- 2) 大学職員の COVID-19 感染が判明した北海道大学ほか、感染が拡大していた北海道を中心に数校が後期日程の個別試験を中止するなど、一部には影響が見られた。
- 3) 2021(令和3)年度入試から、従来の「AO入試」は「総合型入試」へと変更されることとなった。東北大学では、従来の「アドミッションズ・オフィス入学試験(AO入試)」を「AO入試(総合型選抜)」と変更し、略称としての「AO入試」「AO入試Ⅱ期」「AOⅡ期」「AO入試Ⅲ期」「AOⅢ期」は変更しないこととした(東北大学, 2019)。
- 4) 本調査の実施までの研究倫理審査関連手続きは倉元ほか(2019)に準ずる。東北大学における全学学部入試関係の会議(非公表)の審議の資料を収集するための調査と位置付けられている。実施主体の上位組織における研究倫理規定である「東北大学高度教養教育・学生支援機構における人間を対象とする研究の倫理審査に関する申し合わせ(東北大学高度教養教育・学生支援機構, 2014)」における研究倫理審査委員会の審査対象外である。
- 5) AO入試Ⅲ期に関する3つの項目に関しては無回答の学校が1校あったため、相対度数の合計は100%に満たない。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP20K20421 の助成による研究成果の

一環である。

文献

- 中央教育審議会(2014).『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために——(答申)』2014年12月22日
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf) 最終閲覧日 2021年4月3日。
- 大学入試のあり方に関する検討会議(2021).「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」, 令和3年7月8日(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/toushin/mext_00862.html) 最終閲覧日 2021年8月22日。
- 倉元直樹(2020a).『今年の大学生を「ロスト・ジェネレーション」にするな!』「こころ」のための専門メディア note(<https://www.note.kanekoshobo.co.jp/n/nda0a8c35dd00>) 最終閲覧日 2021年4月4日, 金子書房。
- 倉元直樹(2020b).「受験生保護の大原則と大学入試の諸原則」倉元直樹監修・編『「大学入試学」の誕生』東北大学大学入試研究シリーズ, 金子書房, 6-17。
- 倉元直樹・安藤朝夫(2011).「平成22年度入試における東北大学の新型インフルエンザ対策について」『大学入試研究ジャーナル』21, 149-157。
- 倉元直樹・林如玉(2021).「大学入試における少人数を対象としたオンライン筆記試験の可能性——大学の授業における期末考査をモデルケースとして——」『大学入試研究ジャーナル』31, 338-344。
- 倉元直樹・宮本友弘(2018).「大学入試における英語認定試験の利用に対する高校側の意見——主として賛否の根拠をめぐって——」『日本教育心理学会第60回総会発表論文集』, 270。
- 倉元直樹・長濱裕幸(2018).「高大接続改革への対応に関する高校側の意見——自己採点利用方式による第1次選考, 認定試験及び新共通テスト記述式問題の活用——」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第13回大会研究発表予稿集』, 78-83。
- 倉元直樹・長濱裕幸(2019).「2021年度東北大学入試の予告に対する高校側の評価——『受験生保護の大原則』の観点から——」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第14回大会研究発表予稿集』, 39-44。
- 倉元直樹・宮本友弘・泉毅(2018).「大学入学共通テスト記述式問題の利用に対する高校側の意見」『日本心理学会第82回大会発表論文集』, 937。
- 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸(2019).「高大接続改革への対応に関する高校側の意見——東北大学のAO入試を事例として——」『日本テスト学会誌』, 15, 99-119。
- 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸(2020).「高大接続改革に対する

- 高校側の意見とその変化——『受験生保護の大原則』の視点から——『日本テスト学会誌』 **16**, 87–108.
- 文部科学省高等教育局長 (2020a). 『高等学校等の臨時休業の実施等に配慮した令和3年度大学入学者選抜における総合型選抜及び学校推薦型選抜の実施について (通知)』, 2 文科高第 161 号, 令和2年5月14日.
- 文部科学省高等教育局長 (2020b). 『令和3年度大学入学者選抜実施要項』, 2 文科高第 281 号, 令和2年6月19日.
- 南紅玉 (2021). 「大学入試における各国の COVID-19 対策——日本, 中国, 韓国の共通試験を事例に——」『日本テスト学会誌』, **17**, 61–74.
- 大野真理子・花堂奈緒子・播磨良輔 (2021). 「オンライン入試の意義と課題——九州工業大学における総合型選抜 I の事例をもとに——」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第 16 回) 研究発表予稿集 (クローズドセッション用)』, 68–73.
- 大野義文 (2021). 「叡啓大学のオンラインによる入試および一般選抜の教科・科目試験の CBT 試験の実施に関する報告」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第 16 回) 研究発表予稿集 (オープンセッション用)』, 119–126.
- 東北大学 (2018). 『平成 33 年度 (2021) 年度東北大学入学者選抜における「AO入試Ⅲ期」の継続について (予告)』, 平成 30 年 7 月 26 日. (<http://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/news/H33AO3keizoku.pdf>) 最終閲覧日 2021 年 11 月 30 日.
- 東北大学 (2019). 『令和3年度 (2021) 年度入学者選抜における入学試験名称等の変更について (予告)』, 令和元年 7 月 17 日. (http://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/news/20190717yokoku_1.pdf) 最終閲覧日 2021 年 4 月 4 日.
- 東北大学高度教養教育・学生支援機構 (2014). 『東北大学高度教養教育・学生支援機構における人間を対象とする研究の倫理審査に関する申し合わせ』 2014 年 9 月 2 日. (<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/cahe/wp-content/uploads/2011/04/91ba049642718499c6a1a395d0a50ce7.pdf>) 最終閲覧日 2021 年 4 月 4 日.